

理 事 長 所 信

公益社団法人 名古屋青年会議所
2016年度（第66年度）



第66代 理事長
川中 洋太郎

公益社団法人 名古屋青年会議所 理事長所信

公益社団法人名古屋青年会議所

第66代理事長 川中 洋太郎

【はじめに】

我々は名古屋というまちの一員であり、日本という国家の一員である。その一員である以上、このまちのことを想い、この国のことを想うのは当然のことであり、今以上に明るい豊かな社会を築き上げなくてはならないのだ。

今、我々は一体何をしなければいけないのであろうか。私は、我々の活動がまちや国のためになっているかを常に問いかけつつ、ニーズをしっかりと捉え、名古屋青年会議所という組織を最大限に活用した活動を行うことであると考えている。つまり、我々の住み暮らすこのまち、この国の置かれた状況をしっかりと捉え、組織としての名古屋青年会議所と、それを構成するJAYCEEたる会員一人ひとりが共に成長しその力を発揮しなければならないのである。

そのことを踏まえ、各々が実践し行動していくのに必要なことは、この先どのような困難が待ち受けようとも、まずは情熱を持って行動することであると私は考える。一人ひとりが真剣に熱い情熱を持って活動をすれば、そこには必ず人が集まり、人の意識さえ変えてしまうことができるのではないだろうか。そして、活動という言葉が次には市民を巻き込んでいく運動となる。さらには運動を拓げることでこの社会すら「変革」できるものと私は信じている。

このまちや国を変えるのは、紛れもなく我々なのだ。もっと言うのであれば、我々にしかできないと思い行動しようではないか。今を生きる子供たちのために、そして、これから生まれてくる子供たちのために。

社会も経済も成熟しきった現在、ものづくりを支える名古屋という地域に住み暮らす我々に、JAYCEEとして活動する我々に、一体何ができるのかということを真剣に議論し、揺るぎない情熱を持って行動し、このまちから「世界の中心となる名古屋」の実現をしようではないか。

【何のためにJCを行うのか】

我々は何のために青年会議所活動を行っているのだろうか。

「あなたにとって青年会議所はどのような存在なのでしょうか。」

「そもそも、何のために誰のために青年会議所活動を行っているのでしょうか。」

このことを、今一度考えていただきたい。

今、世界は激動の時代を迎えつつある。リーマンショックという言葉聞いてまだ10年に満たないが、世界は大きく動いている。この数年で中国という大国だけでなくいわゆる新興国も経済的に大きく台頭する一方でギリシャ危機のような経済危機が発生するなど、目まぐるしく世界は変化している。国内においても政治体制が二度に渡り大きく変わった。直近ではアベノミクス効果による経済回復など大きく国が変化していることは周知の事実である。これまでの枠組みやシステムが世界的な規模で転換期を迎えており、新しい価値観や、新しいルールといったものが進められている。

そして、それは我々の活動にも当てはまるのではないだろうか。青年会議所も、激動する時代の中で今一度、存在意義を明確にして、活動の意義や目的を再考する必要があるのではないか。

これまで我々は、市民団体のリーダーとして、また、まちづくりのリーダーとしてこの名古屋のまちのために多種多様な活動を行ってきた。毎年、幾多の委員会が設けられ、それぞれが全力を注いで目的を達成してきた。その目的達成の過程において、会員同士が共に汗を流し友情を培ってきたことは動かしがたい事実であり、それはとても素晴らしいことだと思う。

しかし、一方で冷静に振り返るのであれば、青年会議所は40歳までの青年経済人の団体であるという特色を持つほか、単年度制であるが故に、他の市民団体やまちづくりのリーダーとは一線を画した視点を持ちうる団体である。つまり、我々は各分野のプロフェッショナルな団体とはひと味違った視点から、1年という限られた期間に集中的に活動を行い、運動を展開することで新機軸をもたらさうる団体である。これらのことをしっかりと認識して事業や例会に取り組んでいくことが会員のスタンスを明確にし、単なるJCのための活動に、あるいは与えられた職責を果たすためだけの行動に陥らないことにつながるのだ。自分たちの活動の目的をしっかりと定め、何のために誰のために行う青年会議所活動なのか今一度見つめ直そうではないか。

【歴史の継承から名古屋の誇りは生まれる】

あらゆるもの全てに紡いできた歴史があり、それを礎として現在がある。成功の歴史があれば、教訓となる歴史もある。歴史の忘却は、衰退と滅亡の始まりを意味するのだ。しかし、それとは逆に、歴史を紐解き受け継ぐことができれば、現在の立ち位置が明らかに

なり、過去から現在の延長線上に希望ある未来が見えてくる。また、歴史の継承なくして、郷土への誇りや先達への感謝の念が生まれることはない。未来を託され現在を生きる我々は、先達が紡いできた歴史の持つ意義を理解し、それを受け継ぐ気概を醸成していかなければならないのである。では、私たちが暮らす名古屋にはどのような歴史があるのだろうか。名古屋のまちはいわゆる清須越しが行われた江戸時代から、急激に産業都市化した明治・大正期を経て、大東亜戦争と戦後復興など、様々な歴史が積み重なっている。近時においては都市化・工業化・国際化が推し進められてきた。また、名古屋には16の区があり、区毎にそれぞれの独自の歴史を持っている。さらに言えば、区を構成する一つひとつの地域にそれぞれの歴史と特色があるのだ。いわば、名古屋のまちは時間という縦軸と地域という横軸が組み合わさることによって、独自の成長を遂げてきたのである。この歴史の積み重ねとそこから生まれた地域の多様性が、まちの現在の姿を形成しているのであり、その歴史一つひとつ、そして地域の多様性は名古屋の持つ独自の財産であり、誇るべきものではないだろうか。その誇りを失わないためにも、まちが持つ歴史を知ることから始め、まちの特色を理解し、様々な人々に伝えていく必要がある。そして誇りを未来へと受け継ぐことが、名古屋に住み暮らす私たちの担うべき役割なのだ。

【名古屋の魅力を考える】

名古屋のまちは開府400年を超える歴史あるまちとして知られているが、現在の名古屋の姿はどのようなものであろうか。時として、日本最大の工業地帯である中京圏を支える一大都市と言われることもある。あるいは、東京・大阪に挟まれる中、独自の文化や精神性を持った土地と言われることもある。

実際、名古屋のまちを見渡してみると、非常に多くの顔があるのだ。日本有数の大都市という顔、日本有数の工業地帯という顔、数百年前から続く歴史ある街並み、一步郊外へ踏み出せば多くの緑に囲まれた豊かな自然、数え上げればきりが無い。

我々は、このような名古屋の多くの顔のどれだけを知っているのだろうか。改めて考えてみるとそのような疑問が湧いてくる。

であるならば、我々は今一度立ち止まり、自らの住み暮らすまちの「現在」を見つめ直さなければならないのではないか。先に述べたように、歴史を学ぶことは未来を紡ぐための必須条件だが、同時に、現在を知ることにもまた、未来を紡ぐための必須条件であると私は考える。

そして、世界的な時代の転換期に立つ今こそ、改めて名古屋のまちの風景を見つめ直し、その風景から現在の名古屋の持つ魅力や可能性を探究してみようではないか。

【心身を鍛える子育てのあり方】

名古屋のまちは、16の区とそれを構成する地域により成り立っている。都市部でありながら地域コミュニティが比較的密接であると言われることもあるが、核家族化の進行により地域のつながりは希薄になってきているのが実情である。そこで、本年は、文武両道の子育てを地域ぐるみで行うことによって、子供を切り口として地域のつながりを再構築してみたい。

古来、「子は^{かすがい}鎚」と言う。これは、本来、子供が夫婦の縁を保ってくれるという意味であるが、私はそれにとどまらない意味があると思う。つまり、子供は夫婦だけでなく、地域にとっても^{かすがい}鎚になりうる可能性を秘めているのだ。だからこそ、地域のつながりを再構築するには、子供を切り口として捉えるのが最適なのだ。

名古屋青年会議所では、長年に渡り「わんぱく相撲 名古屋場所」を実施することによって、地域教育の一貫として、子供たちに礼節を伝えてきた。このスポーツを通じて礼節や心を磨くという考え方は、素晴らしいことだと私は思う。古くは『史記』に「文事有る者は必ず武備有り」と記され、文と武は両者を兼ね備えなければならず、どちらか一方に偏ってはならないということは古より伝わる教訓である。今風に言えば文武両道ということである。

そして、これまで名古屋青年会議所では、相撲という武に属する手法を用いつつ、礼節という文に属する事項、すなわち心のあり方を教えてきた。また、尾張徳川家のもと武家文化が花開いた歴史を持つ名古屋のまちは、武家のまちとしての精神性を色濃く残しており、この文武両道という考え方を受け入れやすい素地を持っている。そこで、本年は、「わんぱく相撲」というこれまで青年会議所が受け継いできた素晴らしい事業を活用しつつも、相撲だけにとどまらずこの文武両道という観点からの子育てを地域ぐるみで実践する事業を行いたい。

【ものづくりを支える名古屋】

「名古屋」という時、それが名古屋市という行政区を指すこともあれば、愛知県全域を指すこともあり、名古屋市を中心としたより広い経済圏を指すこともある。これを踏まえ、私たちが住み暮らすまち、まさに「名古屋」の位置づけを今一度見つめ直してみたい。

名古屋市を中心とした中京工業地帯は日本という枠組みにとどまらず、世界的に見ても有数の工業地帯である。そして、古からのものづくりのまちが、今や大手自動車産業や、さらには航空宇宙産業といった最先端のものづくり地域を形成しており、その頭脳ともいべき名古屋は、まさにものづくりを支える地域と言えよう。

また、ものづくりを支える頭脳たる名古屋は、経済の方向性を決定づける役割も担っている。単に生産効率を高めるだけでなく、どうしたらより良い社会の発展につながるのか、中長期的な視点を持つ必要がある。私たちは、拙速な経済発展が、貧富の格差を生んだり環境破壊をもたらすなど負の側面を持つことを歴史から学んでいる。であるならば、ものづくりを支える地域に最も求められる役割は、そのような教訓を活かし、これからあるべき経済発展のあり方を頭脳として考えることではないだろうか。

日本三大都市のひとつと言われつつ、大いなる田舎とも言われる名古屋。また、ものづくりのまちと言われる名古屋。そのような名古屋の特性を「ものづくりを支える名古屋」という観点から再構成し、市民が誇りを持てるよう再度検証し発信していきたい。

【名古屋の可能性を考える】

私たちが住む名古屋は、平成25年名古屋港貿易概況によると、名古屋港の貿易額が1兆6千3百13億7千万円と、平成22年以来4年連続の日本一を更新している。東京、横浜、神戸、大阪などの5大港の中でも飛び抜けて大きな数字となっていることがデータでも分かっている。大手自動車産業やものづくりのまちだからということは勿論あるのだろうが、素晴らしく誇れるものである。

しかしながら、そのことをどれだけの市民が知っているのだろうか。そもそも、他の都市の港とどのような違いがあるのだろうか。名古屋の港を、貿易だけの場所とするのではなく、もっと市民が愛着を持ち、誇れる場所にするべきなのではないだろうか。

この港の例に見られるように、名古屋には世界に誇れる数々の魅力があるにもかかわらず、その価値に気づいていないものが沢山ある。そして、その原因としては、名古屋人の気質として内向的な性格というのが挙げられる。

実際、2027年に名古屋―東京間で開通するリニア中央新幹線は、世界最先端の技術であり、名古屋は世界から大きな注目を浴びることは確実である。また、名古屋大学においても産学官連携によりモビリティ社会の実現に向けた研究が進んでいる。そして、MRJなどをはじめとする航空宇宙産業を発展させることにより、将来的に名古屋はアメリカ・シアトル、フランス・トゥールーズと並ぶ世界三大拠点となる可能性も秘めている。しかし、このことに気づいていない市民が多いのではなかろうか。

また、日本初のレゴランドの設置場所選定にあたって、名古屋は日本の中心にあり日本中どこからでもアクセスしやすい立地条件に惹かれて名古屋を選んだと言われている。

このように、名古屋は、世界に向けた大きな可能性を持ち、さらに世界の中心となる可能性を秘めているのだ。

そしてこのような視点を持って、名古屋のまちが、世界の中心となるためにどのような都市計画を持って発展していくべきか、名古屋の持つまちの歴史や魅力も踏まえつつ、市民を交えながら考えてみたい。そして、市民一人ひとりが名古屋のことを見つめ直し、世界の中心となる名古屋に向けたビジョンを持つことで、名古屋と世界の距離が縮まり、それはさらなる名古屋の発展へとつながっていくのだ。

【世界を知り、名古屋を知る】

名古屋青年会議所は、J C I という世界規模の組織の一員である。J C I では、A S P A C をはじめとするいわゆるエリア会議や世界会議を開催しており、名古屋青年会議所会員も多く参加するようになってきている。私も、J C I の構成員としてこれら諸会議をはじめとする国際の機会に触れることが少なからずあったが、これら国際の機会は、私たちの国を、そしてまちを相対的に考える機会を提供してくれる。つまり、国際の機会は、国家とまちを映す鏡なのだ。

青年会議所は、チャンスの宝庫であり、国際の機会に触れることも、日常生活の中ではなかなか得られない成長のチャンスである。名古屋青年会議所も、近年、国際という舞台を身近に感じられる事業や、姉妹J C との交流や新たな姉妹締結などを試みてきた。これはいわゆる民間外交であり、このような草の根の活動は世界平和を目指す青年会議所にとって欠かすことのできない重要な使命である。本年は、改めて国際の機会にスポットを当てて、日本という国の素晴らしさをさらに深く知ってもらうことで、世界を知り、名古屋を知る機会を創出したいと考える。

【会員のさらなる強化】

我々の運動は紛れもなく社会にインパクトを与え、市民の意識を変革させるものであるが、その礎となるのは青年会議所という組織の強化であると考え。「量よりも質」・「質よりも量」という2つの考え方があると思うが、これはどちらも大事である。質と量は両輪であり、そのどちらかが欠ければ組織の力は大きく損なわれてしまうのだ。そして、今や名古屋青年会議所が700名を超える大組織なのは対外からも広く認められているところである。このような現状を踏まえれば、今、名古屋青年会議所に必要なのは、会員の質をさらに強化することであり、それがこの組織のさらなる強化に最も直截につながるものと考え。だからこそ、本年はあえて質にこだわってみたいと思う。そのためには、まずは全ての会員が、自らの資質を高め成長すると共に、会員となることで得られる成長の可能

性を入会候補者に情熱を持って語ること、自らが青年会議所で体験し、得た、全ての財産を語ることが大事なのではないだろうか。

誰しもが、このまちのことを考えてこの組織に入会したとは思わない。だが、ひとつ言えるのは、大半の会員がこの組織に入って良かった、また、この組織に入っていなかったら今の自分はどうなっていたのだろうかと感じている会員が多いと思う。それは、青年会議所活動の中で、この組織が進める運動に共感し、自らのためだけではなく、世のため人のために活動することの素晴らしさを知ることができるからにほかならないのだ。つまり、青年会議所活動の中で J A Y C E E としての魂を揺さぶられ、揺るぎない情熱の火が少しずつ燃え上がっていくのである。

揺るぎない情熱を持って、会員のさらなる強化に臨んでももらいたいと心から願う。

【経済人の団体として】

青年会議所は青年経済人の団体であると言われている。名古屋青年会議所も 700 名を超える青年経済人の団体であり、今一度そのことを見つめ直してみたい。高度経済成長が日本の象徴的発展と捉えられていることから分かるように、経済は国や地域の発展を測る最も分かりやすい指標なのである。そして、名古屋のまちを支える経済人が成長することは、とりもなおさず名古屋のまちの発展につながるのである。

このことを踏まえ、名古屋青年会議所という団体を、今まで以上に、会員一人ひとりが経済人として成長ができる団体、すなわち青年経済人の学舎としての価値を一層高めていきたい。

さらに、会員一人ひとりの資質向上だけでなく、名古屋のまちが目指すべき経済発展の方向性も見つめ直していきたい。名古屋青年会議所は、これまで「ひと」づくり「まち」づくりを中心として名古屋のまちの将来のために運動を進めてきた。経済人の育成を「ひと」づくりと捉えるならば、名古屋のまちがその特色を活かしつつ、どのように経済発展すべきかというビジョンの策定は「まち」づくりにほかならない。経済的に見ると名古屋は不況に強いと言われるが、その根底には、一人勝ちを目指すのではなく、地域経済全体で支え合い共存共栄を目指そうとする名古屋特有の価値観がある。このような視点を持ち、自らの企業をも相対的に捉えられる人財こそ、真の経済人なのだ。

そのような観点から、本年は、会員の経済人としての底上げを図りつつ、真の経済人として持つべき視点を見定めていきたい。

【本物のリーダーシップを考える】

我々青年会議所会員の多くは、それぞれの所属企業においていわゆる経営者側の人間であり、リーダーであると言われている。また、青年会議所は、リーダーを育成する団体であるとも言われる。

青年会議所の中で活動をしていると、度々「リーダー」という言葉を使うことがあるが、果たして我々はリーダーシップの何たるかについてどれだけ知っているであろうか。

プラトンは『国家論』において「英知を持ったリーダーが国を治めよ」と語ったが、このことから分かるように、このテーマは古代より度々論じられてきたものである。1940年代に至るまでは「優れたリーダーには共通した特性がある」という考え方が支配的であった。しかし、その後、リーダーシップに関する議論は加速度的に進み、いまや諸子百家の如く細分化され多岐に渡っているのである。だが、リーダーシップ論は、論じることそれ自体が目的となつてはいけない。すなわち、論じるだけでなく現実の人財育成に活かされなければならないし、育成されたリーダーによって実践に移されることで初めて社会を変革へとつなげ、意味を持たせることができるのだ。つまり、実践なきリーダーシップ論には意味がないのである。

また、リーダーシップのあり方は、人によってそれぞれである。人を力強く引っ張る者もいれば、縁の下から支える者もいる。カリスマで人を魅了する者もいれば、そっと寄り添うことで人の心を動かす者もいる。

私自身、これまで多くのリーダーと出会ってきた。こうした方々には、ある共通した特徴があった。それは勇気とそれに支えられた決断力である。そしてもうひとつは「レジリエンス」を持っていることだ。レジリエンスとは「回復力」「適応力」の意であり、ひと言で言えば「逆境を乗り越える心の力」のことである。新たな時代を迎える今だからこそ、リーダーシップについて今一度見つめ直し、各人にあったリーダーシップのあり方を考える必要があるのだ。

そこで、本年はリーダーシップ論の変遷を踏まえつつも、先達や我々が自らの企業や青年会議所を通じて実践してきた各種の活動・運動をフィードバックし、一企業だけでなく名古屋全体を、さらには日本全体を繁栄へと導くことができる、実践に根ざした本物のリーダーシップのあり方を発信したい。

【教育問題を考える】

昨今、名古屋のまちにおいても様々な私立小学校が開校されるなど、今や親世代である私たちも子供たちにどのような教育を受けさせるかを選択できる時代になってきた。名古

屋のまちで教育の選択肢が広がりつつある今だからこそ、そもそも日本の教育の問題は何かを考えてみたい。

「百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」

これは、長岡藩を支えた小林虎三郎の言葉であるが、教育の重要性は当時と比べて一層増している。つまり、教育というのは、教育を受ける子供個人の成長だけの問題ではなく、まちの、そして国の未来を支える重要事項なのである。もっと言うのであれば、将来の国家の再生は、この教育にかかっているのだ。教育を行う責任の所在については古今、議論のあるところであるが、今や核家族化が進行しており、昔のように親が仕事で忙しく不在の時に祖父母が面倒を見てくれるような時代ではなくなったのは事実である。しかし、このような時代だからこそ将来の日本を考えるためにも、今一度、現在の教育問題を探求し、今後どのような教育を子供たちに受けさせていくべきかということを真剣に考え、未来へとつながる教育ビジョンを確立したい。

【新たな時代のハングリー精神を養う】

内閣府の「国民生活選好度調査」では、国民の主観的幸福度を「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点として、「あなたはどれくらい幸せですか」と問うている。10点と回答する人は、「足るを知る」人だろう。人間の欲望は際限がない故に、どのような状況に置かれても満足できる人が幸せなのだ。自ら歳を重ねてみると、加齢と共に「欲」も薄れ、何事にも満足しやすくなっていることに気づくのではないだろうか。それは「足るを知る」結果なのか諦念なのか、明らかではないが、少なくとも日本は人口減少時代を迎え、もはや拡大・成長の右肩上がり社会ではないため、「足るを知る」こと、過剰な「欲」を持たない生き方は、現代社会を幸せに暮らす上でとても大切である。

しかし、高齢化が進み、全体的に「欲」が削ぎ落とされた社会は、ややもすると活力を失ってしまう。幸せになるには、「まだ少し足りないから、物心共にもう少しこうありたい」と願うことも必要である。個人や社会にとって何かが不足している欠乏状態が、今後の希望や生きる力を生み出し、将来への期待値でもある「欲」が幸せの原動力になる場合があるからだ。

今の日本には、「足るを知る」ことと同時に、「欲」を持ち続けることが重要ではないかと思う。あるいは、「欲」という言葉は「向上心」と言い換えてもいいかもしれない。成熟期を迎えた我が国で、向上心を持ち続けることは簡単なことではない。しかし、だからこそ、

飽くなき向上心を持ったリーダーの存在が、社会をさらなる高みへと引き上げるために必要なのだということを痛切に感じている。さらに言えば、新たな時代に向かって、一人ひとりが向上心を持ち続けることが社会の成長には不可欠なのだ。

今後、避けることのできない高齢社会を迎える中、将来への希望を生み出し、次代へ引き継ぐためには、個人と社会をより良くしたいという未来へチャレンジする「欲」を喚起させる「新たな時代のハングリー精神」が求められているのではないだろうか。成熟したこの時代の現状を踏まえながら、「新たな時代のハングリー精神」を育成していきたい。

【未来の選択】

2015年、統一地方選挙において名古屋市議会議員の改選がなされた。本年、2016年は、7月に第24回参議院議員通常選挙が予定されている。加えて、政局次第では第48回衆議院議員総選挙が実施される可能性もあるとも囁かれている。そして、2017年4月27日には名古屋市長の任期満了が控えている。名古屋市民にとって、2016年は、自らのまちと国の双方の未来を選ぶ上で重要な年なのである。名古屋青年会議所では、これを好機と捉え、政治選択のあり方とも正面から向き合いたいと考える。

青年会議所は政治的に中立な不偏不党の団体であるため、ひとつの政党に偏ることは無い。しかし、まちづくりの団体として取り組んできた課題を市民に対して中立的な立場から選挙の争点として提示することによって、我々の運動を真に成果のあるものとすることができるのだ。まずは政策本位の政治選択とは何かを研究し、市民に分かりやすく発信するよう努めたい。同時に、我々が日々取り組んでいるまちの問題点は、選挙の場においても争点とされるべき課題であることを見つめ直し、選挙に向けて大いに問題提起を行っていききたい。そして、市民一人ひとりが選挙における争点を理解した上で、自ら考え、選択できる選挙へとつなげたい。

また、政治選択の問題は目の前の選挙だけでないこともしっかりと発信したい。選挙教育のあり方は現在の教育における重要問題である。投票年齢が引き下げられ、いわゆる18歳選挙権が実現される本年は、選挙教育にも大きな注目が集まることは間違いない。今こそ、このチャンスを活かし、未来の有権者である子供たちに向けて選挙教育改革を行っていききたい。

【組織のブランディングと内外に向けた運動の発信】

我々が取り組む運動は、JAYCEEが最初の一步を踏み出すことで活動として動き出

す。そして、多くの市民が参画することによって、その効果が高まり、徐々にまち全体を巻き込み社会を変革するムーブメント、すなわち運動へと高まっていく。これこそが、運動の拡がりなのである。そして、真に拡がりのある運動を展開するためには、組織が市民に頼られる団体となり魅力溢れる運動をつくることはもちろん、その運動を効果的に発信する手法を確立し、情報発信力を高めていかなければならない。それと同時に、継続的な運動を可能にする強固な基盤を整備し、市民を魅了し、共感を呼ぶ運動を展開していかなければならない。そのためには、運動を組織の内部、外部に向け発信していかなければならないのである。

近年、世界的な規模で展開されるSNSの登場により、情報の伝達手段がますます多様化しており、IT技術の格段の進歩が気軽さや便利さを生み、広範囲な情報発信を可能にしている。他方で、情報量の増大によって、発信した情報が情報氾濫の渦の中に埋もれてしまう危険性も高まっている。そこで、本年は運動の発信にあたり、伝えたい相手に確実に伝わる発信手法を模索すると共に、画一的な情報伝達に終始することなく、情報の即時性や正確性を基軸とし、情報の受け手側に立った特色ある手法を確立したい。

同時に、我々の団体の価値を一段高め、市民の側からニーズが集まってくる団体へと昇華していかなければならない。我々の運動は一方的な押しつけではなく、市民のニーズを踏まえたものでなければならぬのである。そのためには、情報集約のためにブランディングという観点から組織のあり方を確立したい。

また、組織が拡大する中、組織としての一体感を醸成するためには、内部広報にも力点を置かなければならない。

それらを踏まえ、情報発信のあり方を改めて考察していきたい。

【結びに ～不撓不屈のJAYCEE～】

かつて、日本では15歳で元服を迎え、成人と扱われるようになった。その年、私は名古屋の地を離れ、剣の道を通じて「心・技・体」を磨くため、単身鹿児島へと渡った。何のゆかりもない地にひとりで住み暮らし、「文武両道」を目指し、揺るぎない情熱を持ってひたすら己を磨いた。将来、大人になった時にどれだけ苦労や困難が待ち受けているか分からない。そのような時に、自らの力で壁を打ち破ることのできる人間を育成する、まさに人間道場という3年間であった。

そして今、私は、新たな人間道場に立っている。縁あって入会した青年会議所であるが、この道場で、私はひとりのJAYCEEとして、名古屋というまちと向き合い、日本という国と向き合おうとしている。

日本という国の歴史を振り返ってみれば、数え切れない幾多の困難があった。しかし、いつの時代にも困難を打破する時にはこの国を牽引するリーダーたちがいたのだ。そして、リーダーたちは、真剣に郷土を愛し、祖国の将来を憂い、揺るぎない情熱を持って勇猛果敢に挑戦したのだ。いかなる困難に見舞われても決して諦めることなく挑戦し続けたからこそ、社会を変革することができたのだ。どのような困難にぶつかっても決して諦めない強い心、いわば、「不撓不屈」の精神によってこの祖国を切り拓いてくれたのだ。そのような先達の想いや行動というのは、今我々にも共通するものではないだろうか。この郷土を想い、この祖国の将来を創るのは、責任世代たる我々青年の使命なのだ。そして、我々の運動を支える原動力は、運動にかける揺るぎない情熱である。我々は、揺るぎない情熱をもとに、不撓不屈の精神を持った J A Y C E E へと成長しなければならないのだ。

我々の運動は、「できるか、できないか」を問題とするものではない。「やるか、やらないか」なのだ。私は今まで青年会議所で経験したこと、先輩諸兄からもらった恩を大事にし、「不撓不屈」という精神を持って挑戦し続けていきたい。

そして、この想いを全会員で共有し実践した時、誇りと魅力溢れるまち名古屋となり、必ず「世界の中心となる名古屋」の実現は可能となる。

今こそ、我々 J A Y C E E が揺るぎない情熱を持って、行動しよう。

新たな時代に向かって、今を生きる子供たち、これから生まれてくる子供たちのために。

